

古代史ファンの友人は禰宜田先生のレジメにある“遺跡を取り巻く環境の変化”を見て軽い驚きを覚えたそうです。やよい塾の塾生として弥生ファンは歴史ファンとしてメジャーであると思っていたからです。しかし、改めて考えてみると「城(主に中世)」、「古墳」、「土偶(縄文)」はいずれもビジュアル的にインパクトがあり、素人でも取っ付きやすそうです。歴史知識に精通していなくても、見たことがある、行ったことがある、だけでも親近感を湧かせてくれるからでしょう。我々弥生ファンとしては、縄文や古墳の知識もしっかり抑えた上で、縄文・古墳ファンを多様性に富んだ魅力あふれる弥生の世界に誘っていきましょう。

この講義の時間帯に、アゼルバイジャンの首都バクーで開催中の第43回世界遺産委員会において、世界文化遺産登録の審議が開始され、夕方五時半過ぎに日本が推薦した「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産に登録されることが決定しました。

百舌鳥・古市古墳群は、百舌鳥エリア(堺市)と古市エリア(羽曳野、藤井寺両市)に密集し、4世紀後半から5世紀後半にかけて築造された49基の古墳で構成されています。墳丘の全長が486メートルで日本最大の前方後円墳「大山古墳」(仁徳天皇陵)、同425メートルで2番目の規模の「誉田御廟山古墳」(応神天皇陵)など、さまざまな大きさや形状の古墳が含まれます。大山古墳は広大さにおいて世界最大級の墓にも数えられます。ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議(イコモス)は、「古墳時代の埋葬の伝統と社会・政治構造を顕著に示している」と評価していました。今回の登録で日本の世界文化遺産は19件となり、4件の自然遺産と合わせ、国内の世界遺産は合計23件となりました。

世界遺産リストに登録されるためには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている登録基準のいずれか1つ以上に合致するとともに、真実性(オーセンティシティ)や完全性(インテグリティ)の条件を満たし、締約国の国内法によって適切な保護管理体制がとられていることが必要だそうです。

このオーセンティシティに関して5月14日付けの朝日新聞に、中核となる大山古墳(伝仁徳天皇陵)などの巨大古墳が宮内庁管理の禁断の地であることの懸念が書かれていました。学術研究の蓄積から推測される被葬者像と陵墓としての名称の齟齬が問題視され、非公開でもある現状は世界遺産に欠かせないオーセンティシティ実証への影響が指摘されてきました。関西大の今尾文昭氏は「世界遺産に登録されるのは学知が価値づけた古墳群で、『陵墓群』ではない。遺跡名を併記すべきだ」と厳しく批判しています。「名称の一元化は陵墓と文化財の2つの実態があることを隠してしまう。併記することが学びのきっかけになる」として昨年の9月に日本考古学協会など13団体が連名で「百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産推薦に関する見解」を発表しています。見解の中では、1. 構成資産の十分な保存・管理を図り、公開を原則とした活用がなされること。2. 構成資産名については、学術的な観点にもとづくものとする。この2点を強調し、登録後の7月23日にも声明を出されています。

オーセンティシティでは別の懸念もあったようです。それは整備の方法です。世界遺産の登録には「本物であること」が求められ、人の手を極力加えないのが望ましい、とされます。イコモスの委員は、宮内庁が市民の立ち入りを制限し、厳密に管理する

姿を高く評価して、「これなら真実の姿が未来に伝わる」と感嘆していたと言います。これに対し、日本の文化財行政は「復元整備」が基本です。地下に埋もれた遺跡の価値が分かり易いように、建物や状況を復元する、という論理です。

寺山南山古墳には埴輪を並べて復元し、墳丘にも登れるようにする計画でしたが、委員には全否定されました。鍋塚古墳や助太山古墳では腐葉土が重なった墳丘に、黄色っぽい真砂土を盛った現状を、「土を盛らないと墳丘の崩壊が進むし、違う土を使ったのは、オリジナルの墳丘と区別できるから、と“本物の遺跡”を守るための整備であり、材質が違うからこそ「真実性」を保証できる」と熱く説得したそうです。熱意が通じたのか、5月にイコモスは同古墳群を除外なしの満額回答で遺産登録をユネスコに勧告しました。「過剰な復元は否定される。世界遺産として、ふさわしい見せ方、管理の方法を考えなければ」と表情を引き締めているそうです。



寺山南山古墳出土の家形埴輪

